

Special Need Education Research Center

SNERC通信

(第26号-2012年10月)

国立大学法人 筑波大学
 特別支援教育研究センター
 センター長：四日市 章
 〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1
 TEL&FAX：03-3942-6923
<http://www.human.tsukuba.ac.jp/snerc/>
 mail：snerc@human.tsukuba.ac.jp

■ 巻頭言

より質の高い特別支援教育システムの向上を目指す「連携」の取り組み

筑波大学特別支援教育研究センター 藤原 義博



より質の高い教育システムを目指す特別支援教育では、柔軟で弾力的な制度の構築や教員の専門性の向上を求めています。ここでは関係者・諸機関の「連携」という言葉が一つの重要なキーワードとなっています。

具体的には、都道府県における広域特別支援連携協議会の設置や、福祉、医療、労働などの関係機関等と連携した適切な個別の教育支援計画の作成・活用、教育委員会、教育センター、学校、NPO、民間団体等の支援活動の協同及び情報共有等の多面的有機的なネットワーク体制の構築・体系化を目指す団体間の連携などが示されています。また、卒業後の就労・自立・社会参加も含めた共生社会システムや就労支援の一層の推進を目指す地域における社会福祉施策や障害者雇用施策、労働・福祉等の関係機関と特別支援教育との連携の強化が求められています。

そして、現在準備が始まっているインクルーシブ教育システムの構築では、障害のある子どもの地域における生活を支援し、域内のすべての子ども一人一人の教育的ニーズに応える観点から、支援地域内の教育資源（幼・小・中・高等学校及び特別支援学校等、特別支援学級、通級指導教室）のスクールクラスター、交流及び共同学習の推進や特別支援学校のセンター的機能の活用、都道府県と市町村両者の教育委員会連携の円滑化などが課題となっています。

さらに、高い教育的効果が期待できる、幼児期を含めた早期から成人に至るまでの一貫した子どもの教育的ニーズに応じた教育支援を保障するための教育相談や就学相談の充実や専門的な教育が受けられる医療・福祉・教育との連携体制の確立も課題とされています。

そこで、豊かな障害科学の専門教育・研究領域と幼稚部のある5つの附属特別支援学校（知的障害、聴覚障害、視覚障害、肢体不自由、自閉症）を有する本学筑波大学では、附属大塚特別支援学校（知的障害）を中心に、当研究センターと障害科学域等の大学教員、5つの附属特別支援学校、附属学校教育局とが協働的・組織的に連携し、知的障害児・重複障害児・発達障害児の超早期（0歳児～2歳児）段階での教育支援の在り方を検討するための「超早期段階における知的・重複・発達障害児に対する先駆的な教育研究モデル事業」に平成22年度より取り組んでおります。11月10日（土）に開催されるセンター・セミナーでは、最終年度の3年目を迎えるその研究成果の報告として、シンポジウムを開催する予定です。ぜひ、ご参加いただきますようお願いいたします。今後も当研究センターは、特別支援教育の促進・展開に寄与することを使命に、先端的な本学附属特別支援学校間及び大学との連携研究に取り組んで参ります。今後の成果をどうぞご期待ください。

ボリビア国研修

6月4日から29日まで、南米ボリビア国から10名の研修生が来日し、11日から22日までの2週間は、附属大塚特別支援学校と附属桐が丘特別支援学校で研修が行われました。

附属大塚特別支援学校

野村 勝彦

6月11日(月)から22日(金)まで、南米ボリビア多民族国から特別支援教育の研修(JICA ボリビア国特別支援教育教員養成プロジェクト)のため、5名の研修生(知的障害教育:教員養成大学教員、特別支援学校校長・教員)が附属大塚特別支援学校に来校しました。10日間の研修では、本校の教育に関する講義の受講(教育課程、学校研究、子どもの実態把握、個別教育計画、授業づくり、教材開発、進路、給食・保健、行事等)、幼稚部・小学部・中学部・高等部の授業及び施設見学、小学部(音楽)での研究授業といった内容を行いました。



特筆すべき二つの出来事をここで紹介いたします。一つ目は、朝の合同朝会で、ボリビア研修生による国の衣装とダンスの紹介の後、大塚特別支援学校の児童生徒によるボリビアのダンス(在日ボリビア人のダンス教師の指導の下に練習を行った)が披露され、研修生と子どもたちとの楽しいコラボレーションの花が満開となったことです。二つ目は、研修生にとって一生忘れがたい出来事「避難訓練(地震)での起震車の体験」でした。震度7の体験は、恐怖とともに大切な教訓を得たと、研修生から感想を伺いました。



附属桐が丘特別支援学校

吉沢 祥子



桐が丘でも5名の方が肢体不自由教育の研修に来られました。5名の方は本国ではそれぞれ校長、教員養成校教師、現場の担任などで、いずれもボリビアの特別支援教育の構築と望ましい発展のために日本に派遣された方々です。研修期間中、特別支援教育では必須である、子どものニーズに基づく個別の指導計画作成の考え方、それを基にした自立活動指導の理論や指導技法、授業案作成や教材における留意点、教科指導の実際(特に算数)、子どもの実態把握に必要なアセス

メント等について、講義、授業見学、演習を行い、更に模擬授業実施、関連する施設等の見学など盛り沢山に詰め込んだ日程をこなして頂きました。

昼食の時間が唯一の休息时间と言う様なきつい研修でしたが、ボリビアの先生方は桐が丘の子ども達や教員とすっかり仲良しになり、ある日の夕刻、学校の会議が終わるのを待ち18時から“日本・ボリビア混合サッカー親善試合”が持たれました。研修最終日の昼休みに体育館でボリビアの民族衣装の踊りが披露された際、子ども達からは思いがけなく別れを惜しむ手紙が渡され、子ども達にはなじみの薄い国であったボリビアが強く印象づけられた様です。

日本での研修が是非実を結ぶ様に願っています。



■現職教員研修生の研修日記

本センターでは、高い専門性を持つ教員の養成を目的とし、一定の教育経験を持つ教員等を対象に研修生の受け入れをおこなっています。ここでは、筑波大学附属特別支援学校5校での実習と、本センター及び筑波大学大学院教育研究科特別支援教育専攻での講義・演習を組み合わせた長期研修プログラムを提供しています。このコーナーでは、研修生の皆さんに日々頑張っていることなどを寄稿して頂きます。

千葉県立袖ヶ浦特別支援学校 藤田 錦一

今年度、千葉県長期研修生として、筑波大学特別支援教育研究センターでの現職教員研修生の一員となり、貴重な学びの機会をいただいたことに心より感謝申し上げます。また、安藤隆男先生には、ご多忙にもかかわらず、肢体不自由児教育の醍醐味と奥深さに関するご指導をいただき、深く感謝申し上げます。

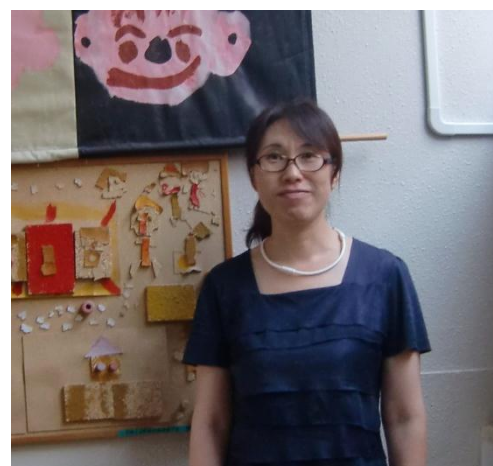
所属校では昨年度から3年計画の研究として「肢体不自由児の表現する力」を研究題目に挙げて、研究を進めております。肢体不自由児教育には数多くの課題がありますが、その中でも「表現する力」の育成を共通課題として捉えています。私も学校が抱える問題意識における解決の糸口となればと思い、「脳性まひ児の表現する力」に関する研究を進めています。課題は多く、取り組むべき事柄も壮大ですが、一つ一つの課題に真摯に向き合い、所属校の先生方に研究報告できる日を目標として努力していきたいと思っております。

センターの先生方、同期の研修生、筑波大学の学生達など、様々な出会いに感謝するとともに、この出会いが自分を育ててくれていると感じる毎日です。



千葉県立千葉特別支援学校 浅沼 千鶴

迎えた研修生活は、「一年間の見通しがもてない」と戸惑いの中でのスタートでした。センターの先生方のご指導、特別支援教育を多方面から学ぶことができるプログラムに触れ、大学での聴講やゼミへの参加、大塚特別支援学校での研修等を体験していくことで、知ることの面白さ、学ぶことの喜び等、心の底から湧いてきました。同時に「戸惑い」が「楽しみ」に、「不安」が「期待感」に変わってきています。自分の気持ちの変化の中で「(障害のある)子ども達は、わからないことの多い毎日を、きっとこんなふうには不安いっぱいの中で過ごしているのだろう。」と子ども達の気持ちを思い、「知ことは面白い」「学ぶことが楽しい」「自分でできることが嬉しい」等、私と同じ思いを子ども達も味わってほしいと改めて願うようになりました。研修もちょうど折り返し地点です。引き続き、センター及び大学の先生方にご指導ご支援をちょうだいしながら、子どもたちの喜ぶ姿と満足げな笑顔をたくさん見ていくために研修に励み、ちょうだいした時間を有意義に過ごしていきたいと思っております。



■平成24年度 筑波大学免許法認定公開講座

筑波大学免許法認定公開講座は、平成16年の特別支援教育研究センター開設を期に人間系（障害科学域）、附属特別支援学校との連携のもと、実質上の企画運営を本センターが行って来ました。今年度は12日間10講座を実施し、全国からのべ500名ほどの方が受講されました。各講座共に、猛暑の中、熱気があふれる講義となりました。

人間系及び附属学校の先生方をはじめ、ご協力くださった皆様方には深く感謝申し上げます。



第14回特別支援教育研究センター主催セミナー

シリーズ：特別支援教育の展開 (3)

障害のある子の超早期段階における教育的支援の在り方 一貫した支援を目指して

現在、発達障害を含む障害児に対する超早期段階からの家庭や関係諸機関との円滑な連携による教育と支援の在り方が求められています。これに対し、「超早期段階における知的・重複・発達障害児に対する先駆的な教育研究モデル事業」(筑波大学)はこれまで3年間にわたり本センターも大きく関わりながら取り組んでまいりました。

セミナー第1部シンポジウムは、連携の支援に関する現状と課題について、研究の成果発表と話題提供をおこないます。第2部講演会は、乳幼児期の発達支援における地域機関の『横の連携』、ライフステージに沿った関係機関間の『縦の連携』と、それらをつなぐ移行支援、連携システムの基盤となる法制度の現状と課題についてご講演いただきます。

プログラム

受付 12:30～13:00 開会行事 13:00～13:15

第1部：シンポジウム 13:15～14:45

「超早期段階における知的・重複・発達障害児に対する先駆的な教育研究モデル事業」の成果概要 筑波大学：藤原義博・野澤純子

「筑波大学附属大塚特別支援学校による乳幼児期の地域での取り組みと連携」

附属大塚特別支援学校：安部博志・高橋幸子

「超早期からの附属学校間連携の取り組み」 附属聴覚特別支援学校：佐藤幸子

コメンテーター：筑波大学 佐島毅

第2部：講演 15:00～16:10

「我が国の障害乳幼児支援における関連機関連携の展望と課題

ーライフスパンの視点からー」 宮田広善(姫路市総合福祉通園センター所長)

閉会行事 16:10～16:20

日時 平成24年11月10日(土) 13:00～16:20

場所 筑波大学東京キャンパス文京校舎 134教室

申込み先 筑波大学特別支援教育研究センター

Tel:03-3942-6937 Fax:03-3942-6938

共催：超早期段階における知的・重複・発達障害児に対する先駆的な教育研究モデル事業(筑波大学)